會津塔の峠

（岩代國）

何れの處か氤氳の氣蒼烟窈冥に入る
光寒うして淡白を浮べ霧冷かにして
餘青を漾はす靄々霜樹を籠め
濛々葦汀を障ふ秋山時に靉靆たり
點じ染めて雲屏と作ると王廷魁が
賦せしは恰も此地の秋烟を
見たりしに似たり

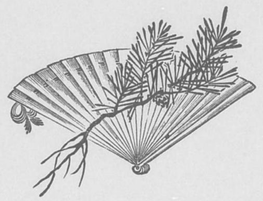
はるも立つ
深山の谷の川霧は
峯のあさ日に
かすみとぞなる

此契冲師の歌は此所の春霞をながめたるがごと
し古人の辭藻夏冬の風月にかなふも多からん

會津若松城

（岩代國）

豐太閤諸將滿座の中にて東北を鎭靜する大器は蒲生にしくもの無しと撰び出されし名譽は氏鄕の心中には感喜せしかはた不平なりしか其命やむを得ざりしにもやあらん此所に居城を占め黑川つりかはり寛永以來保科氏の封ずる所となれりしが明治戍辰の兵燹にかゝりて城市昔日の觀をうしなひたれど其戸口減ぜずなほ賑へり



といふ名を改めて若松と號せり其後上杉氏加藤氏とう

飯盛山白虎隊墓

（岩代國）

かなしきかも白虎隊君辱めらるゝ時は
臣死すといふ義をひたすらに思ひこみ
てまだ綻びやらぬ花の莟をあだに散ら
しけることよ惜しきかも白虎隊その寄

せくる軍は錦の御旗なるをかへり見ず
はやりすゝみて射向ひしことよ早くそ
のあやまちを悟りてまつろひ申し此眞
心もてつかへ奉らば匂ふ盛の春にあふ
べかりしものを

柳津虛空藏堂

（岩代國）

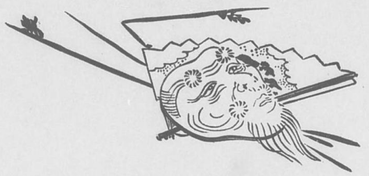
平城天皇の大同二年法相德一和尚虛空藏菩薩の靈瑞を感得し此地に一宇を創立して圓藏寺と號す其以來代々の國守これを敬信し織田豐臣德川の諸公も或は寺領を寄せ或は修覆再建等を營まれ維新前まで領主松平氏も先規の如く寺領山林等を寄進して保護を加へられたり維新後また保存法を設け今日に至りて舊觀をあらためず其堂宇の宏壯風景の明媚はいはんもさらなり

猪苗代湖十六橋

（岩代國）

東西三里南北二里周回十三里に餘れり湖中の一島を翁島といひ湖西の石橋を十六橋といふ天晴れ風靜かなる日は水面鏡の如く磐梯の山影照映して裏繪に似たり松方海東氏詩あり證とす

猪湖隔在白雲邊
鑿岳介林知幾年
驚見禹功功成處
飛流萬丈掛青天



又ある人の歌に

みちひする潮なき海も舟人の
世わたるわざぞからくありける

磐梯山

（岩代國）

大同二年にこの山破裂し月の輪更科郷一面の湖水と變ず猪苗代これなりと口碑に傳へ又東國旅行談に猪苗代湖水の東に磐大山と名づくる嶮々たる高嶺より炎火立ち登り烈烈として其烟雲にひとしく天を焦す勢ひなりと記し其他の書にも薫烟を吐くと見にたれば昔は噴火せし事は明らけしされどいつしかそれも絶にて近年に至りてはさる噴火山なりとも思はぬ程なりしに明治二十一年七月十五日午前七時半に轟然として破裂せし事は世の知る所なり

福島信夫橋

（陸奥國）

忍ぶ山しのびてかよふ道もがな人のこゝろの奥も見るべく　と詠みしむかしは知らず今はにぎはしき福島の町より遠からねばこれにのぼりて吾妻山の春の曙をめで阿武隈川の秋の夕をもてあそぶ人は多かれど忍びてかよふ道をたどるものは無からん信夫橋もあらを世に知られしのこゝろには其名を引くべうもあらずたゞいにしへを懐しむかたばかりに其となへを假るべくゃはに渡り合ひて文字摺の亂るゝ思ひ

飯坂十綱橋

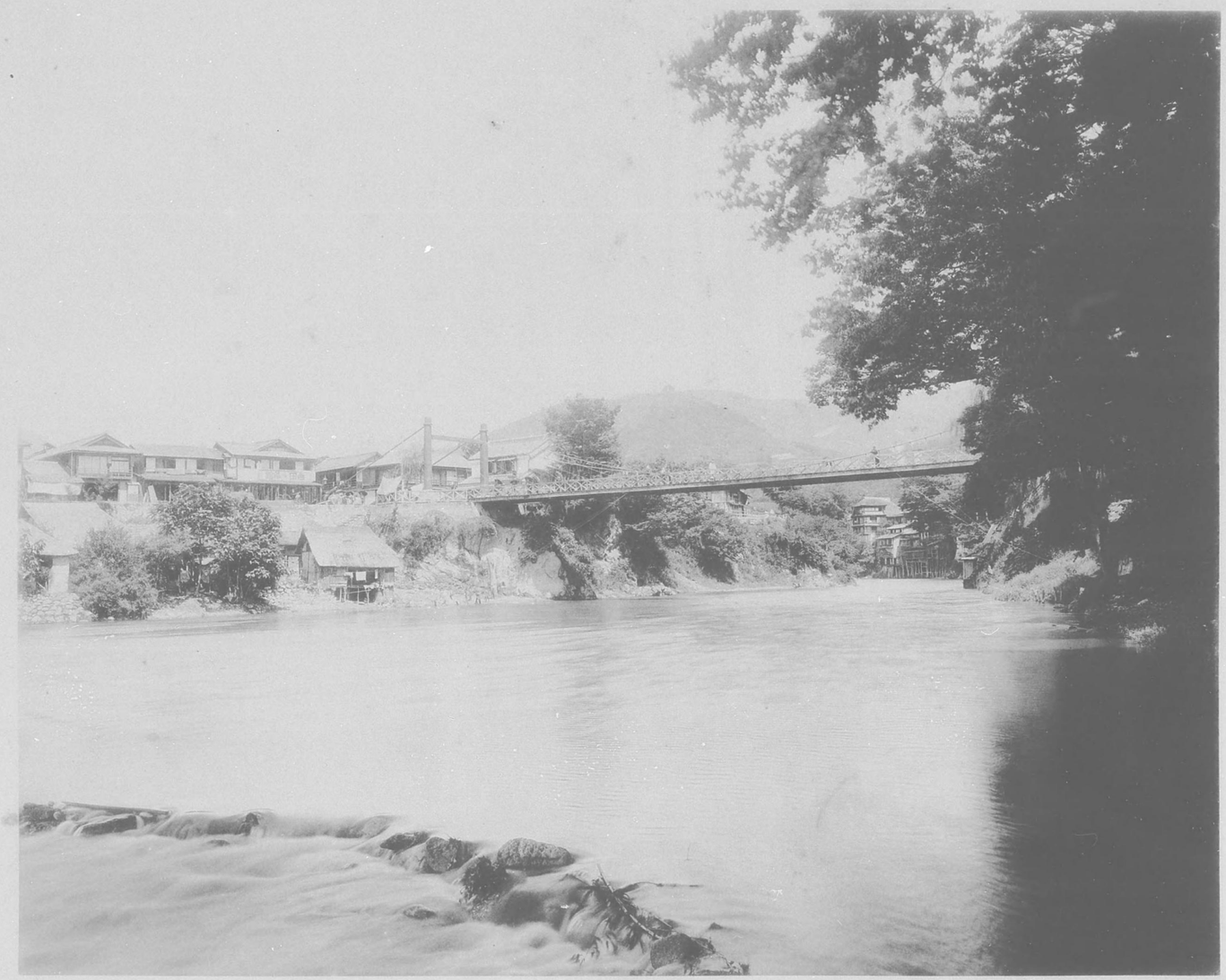
（岩代國）

飯坂より湯野に通ふために摺上川にわたせり柱脚を用ゐず銅綱をもてこれを繋げる故に釣橋と稱ふ奇巧驚くべし橋下の水流は箭の如く走りて川中の岩にふれ白玉を飛すさまいと潔し夏夜には飯坂湯野の人々はさらなり浴客も出て來りて橋上に納涼するもの夥しく其賑しさ山間とは思はれず

千載集に親隆朝臣の

陸奥のとつなの橋にくる縄の
絶ねずも人にいひわたるかな

とよめりし頃はいかなりけん



白河南湖松虫原

（磐城國）

一日又一日　今朝抵白川　過毛平野絶
入奥好山連　遺跡多爲寺　故城皆作田
來尋舊關處　雲樹翠攙天

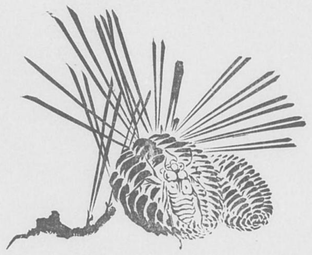
大窪詩佛もかく賦せし如く白川といへば先關處の跡を思はぬ者無けれどそは白川町よりは程遠き山間に在りて尋ぬるに不便なり町に近くて且風光の美なるは南湖にしくものなし樂翁少將此地の城主たりし時湖畔の處々に雅名を付し十七勝とせり松虫の原も其一なり

仙臺青葉城

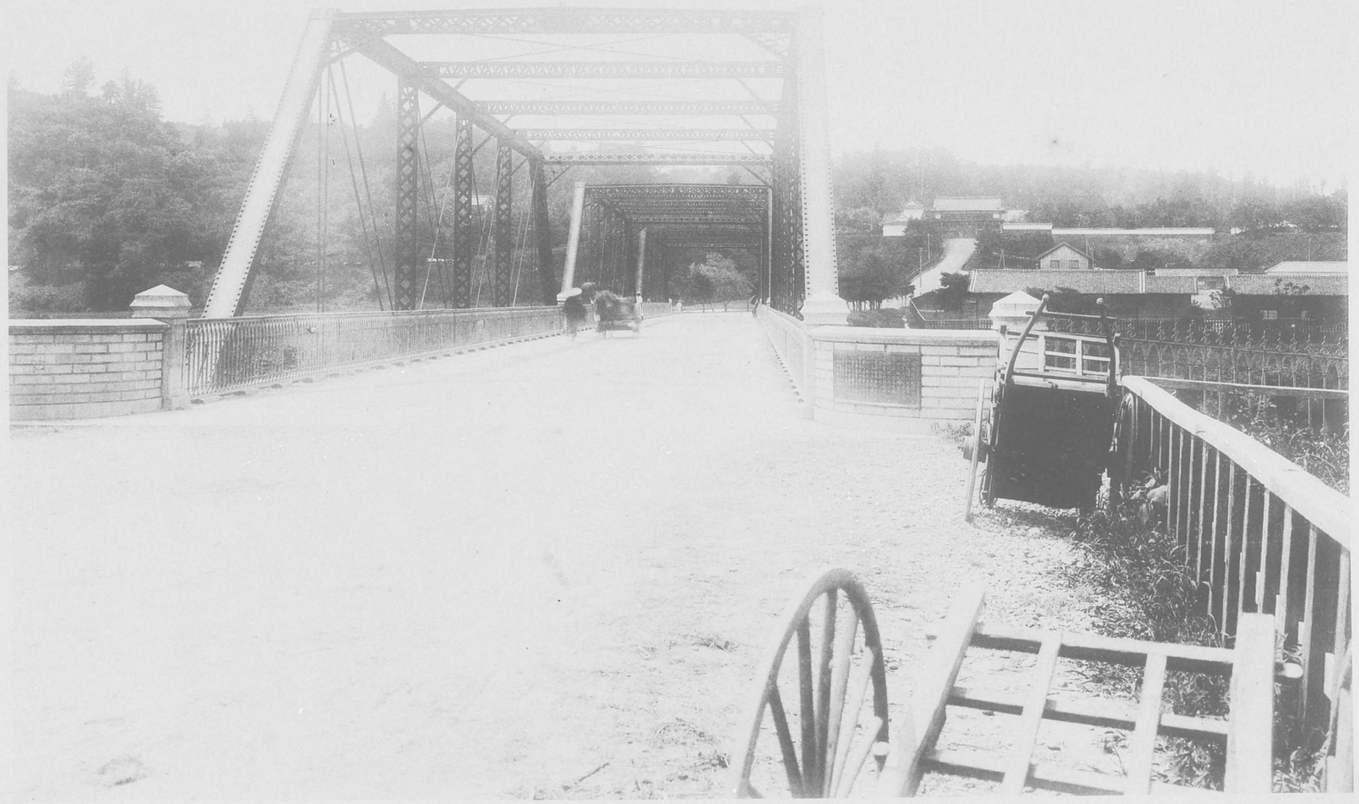
（陸前國）

伊達黄門不世出の雄姿にして豐徳二公に屈從せしは時運の然らしむるところもとより然るべしその使臣を海外に遣はして彼の邦の形勢をうかゞはしめし偉志もまた遂げざりしはさぞな遺憾なりけんかしされど其武威は永く傳はりて朽ちず古歌に

尋ねばや
青葉の山の
おうざくら
花の殘るか
春のとまるか



と詠めりし如くのこれる城趾を花の香としのびとまれる英名を春となつかしむもあはれ〳〵



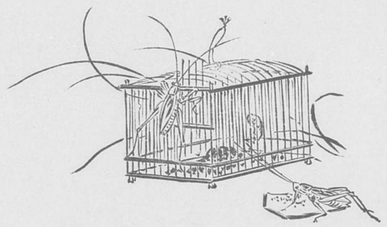
宮城野

（岩代國）

みさふらひ御笠と申せと歌ひ風を待つごと
君をこそ待てと詠めし宮城野の原は萩はさ
らにもいはずいろ〳〵の草花さま〴〵の虫
の音いづれの方に宿らんと心をまどはしむ

萩花班爛露芳輕
雨濕新秋野色清
五十里程紅錦障
石崇宏麗滿宮城

仙府山人



ふきわたす
萩よりはぎに亂れつゝ
風もいろなるみやぎ野のつゆ

本居宣長

野田玉川

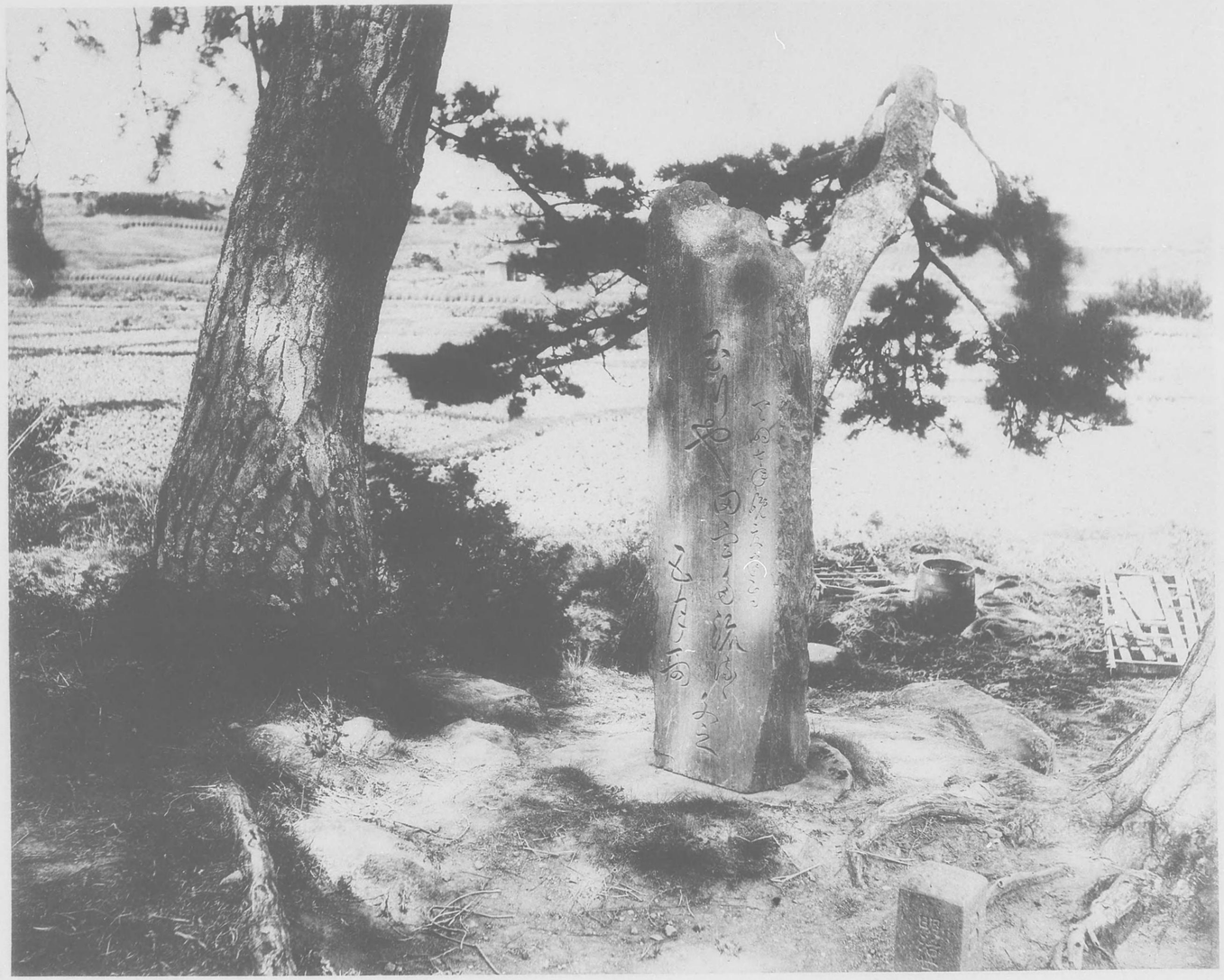
（磐城國）

山吹の露そふ水を駒にかはんとし萩の色なる波の月をあすも來んと契りしはさることゝ咲たわむ卯の花をしがらみかけたりと見しもをかしう晒す手つくり更に昔の人を戀ひしもわりなし忘れても旅人の汲みやせんとはいかなる心にてつられ給ひけんかくとり〳〵に詠めし川の名は同じことながら所はむの〳〵異なるを此野田も能因法師が

夕されば
汐風こして
みちのくの
野田の玉川

千鳥なくなり

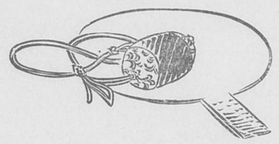
の歌によりて其名高くこれを合せて六つの玉川としもいふはいづれの世より稱へそめけるにか



鹽竈神社

（陸前國）

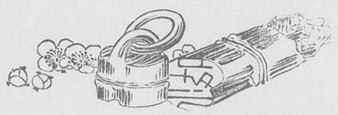
わがみかど六十餘國の中に鹽竈といふ所に似たる所なかりけりと伊勢物語にいへるにても此浦のけしきの優れたるを知るに足れり神社は北方の丘に在りて殿作りいと美しく古りたる樹立ちしげりて神さびたり社前にくろがねの燈籠あまたあるがなかに奥羽押領使鎭守府將軍藤原秀衡の三男和泉三郎忠衡が文治三年七月十日に寄附せし南蠻鐵にて造れるものいとめづらし此地は上古鹽土老翁が鹽燒く事を始めて民に教へし所なるゆゑに鹽竈と名づけしなりと云ひ傳へ鹽竈櫻また名高し



松島五大堂

（陸前國）

ことふりにたれど松島は扶桑第一の好風にしておよそ洞庭西湖に耻ぢず東南より海を入れて江の中三里浙江の潮をたゝふ島々の數を盡して欹つものは天をさし伏すものは波にはらばひ或は二重にかさなり三重にたゝみて左に分れ右に連なる負へるあり抱けるあり兒孫を愛するが如しためたるが如し其けしき皆然として美人の顏を粧ふちはやぶる神代の昔大山祇のなせるわざにや造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞をつくさん



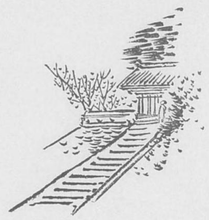
松島五大堂

（奥の細道）

雄島渡月橋

（陸前國）

雄島が磯は地續きて海に出づる島なり雲居禪師の別室の跡坐禪石などありはた松の木蔭に世を厭ふ人も稀に見ゑ侍りて落穗松笠などうち煙りたる草の庵靜に住みなしいかなる人とは知られずながらまづなつかしく立ち寄る程に月海に映りて晝のながめ又改む江上に歸りて宿を求れば窓を開き二階を作りて風雲の中に旅寢するこそあやしきまで妙なるこゝちはせらるれ



松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

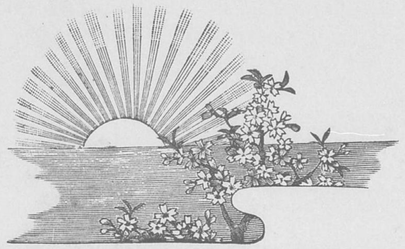
予は口を閉ぢて眠らんとして寢られず舊庵をわかる時素堂松島の詩あり原安適松が浦島の和歌を贈らる袋を解て今宵の友とす且杉風濁子が發句あり

（芭蕉）

双子島旭

（陸前國）

煙波三萬六千項　羅列二百九十嵜
天造地設神異境　巨靈何年費鐫鑱



とは大槻磐溪が松島長篇の筆頭第一にいへる句なり群島すべて神異境なるが中にも双子島に旭日を待ち出でたる勝光譬へんに物なし水の面まだ夜を殘せるほどは影浮ぶ松もうす黑きがやうやう明り行くに隨ひて綠の色あざやかに波は紅に匂ひて光りまばゆし

不老山

（陵前國）

山脚に竇穴多く波浪突入して巖背に出づ一進一退雷とゞろき雪を飛ばせり岩崖に天然の佛像ありて土人これを五百羅漢と稱ふ此山もとは念佛壇と呼びしを伊達綱村侯嘗てこゝに遊びて不老山と改められしとぞげに島の名の松の常盤にちなみて老いぜぬ山といはんはふさはしかるべし不死の薬も求め得べき仙境になん

＊　＊　＊　＊　＊　＊

年よらぬ山の白髪や

松の雪

花魁島

（陸前國）

賴春水が詩に

一碧琉璃澹不波　平灣無數點青螺
月明宛似龍燈出　分付光輝夜色多

小澤蘆菴が歌に

色かへぬ
松がうらしま
いつ見ても
たづぞ群れゐる
まつが浦島

詩は夜のさまを賦じ歌は晝のけしきを詠めるなりなべて此島の面白さを明けて暮れてのみかは晴ひとへに好く雨も亦奇し

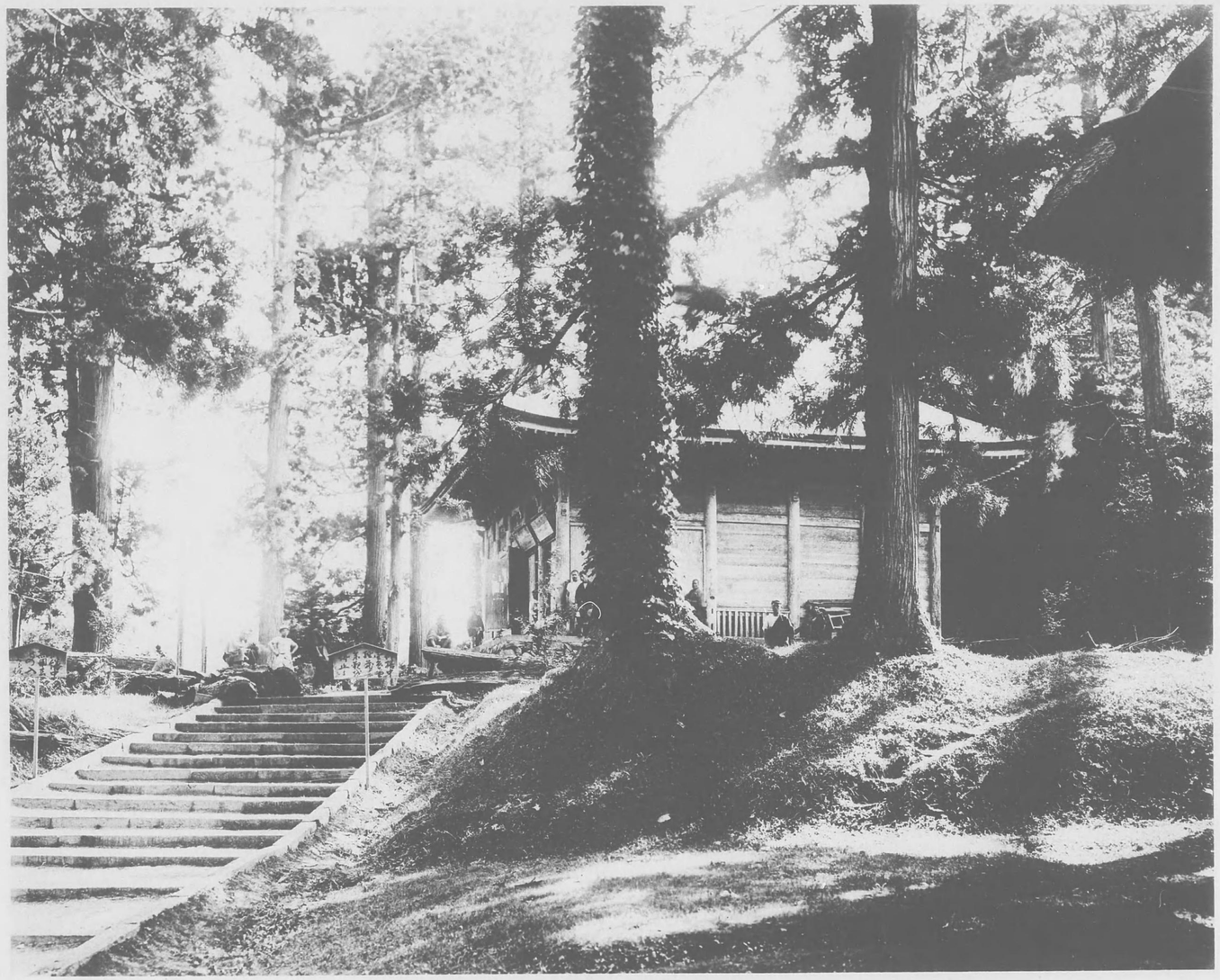
中尊寺金色堂

（陸中國）

關山中尊寺は弘台壽院とも云ひて開基は慈覺大師にして其後年歴て鎮守府將軍藤原清衡の中興なり清衡は秀衡の祖父にして此時既に勢殊に盛なりしかば此中尊寺を中興して堂塔四十餘宇を建立せりとなりさて右の堂塔伽藍建長四年回錄して纔に經藏一箇所金色堂一宇を殘せり是*も星霜久しく移つの堂に又別に新に覆堂を造られ風雨を避け修營を加へしめ給ふ其後今に至り時の國守より代々覆堂を修理して風雨を防ぐ此故に今日に至り清衡建立の金色堂竝に經藏嚴然と殘りて昔の俤あり

りて破壞に及びしを正應元年鎌倉將軍惟康親王歎き思召し北條貞時に命じ此二

（東遊記）



然さ殘りて昔の俤あり

五串嚴美溪

（陝中國）

酢川嶽より發する一水もろ〳〵の溪流を集めて東に回り來り山峽に蹙りて二層に落下るを五串の瀧とす是卽磐井川の上流なり岩より岩に架けたる橋の畔に松崎博士が橋の故由を記せる文白川侯が題字の碑を立てたり溪中に數十人を坐せしむべき平らに大なる岩ありて瀧を見るによろしげに此溪のさまいはほむごそかに水うるはしきからにいつくしとしも名づけたるならん

盛岡市中

（陸中國）

盛岡市は舊南部侯居城の地にて今岩手縣廳を置かる北上川の舟運および東北鐵道の青森に達する便あるゆゑに百貨流通してその繁華仙臺と伯仲す

往時は北上川に浮橋といふ市内に古社舊寺公園等の詣づべく遊ぶべき所あるが中に梁をわたしたりしが明治七年木橋を架けられこれを明。

はるかに岩手山の高峯を望む最壯觀なり一名を岩鷲山とも稱し古人の歌詠多し本市を距ること九里

末松山波打峠

（陸奥國）

古今集に讀人不知

君をおきてあだし心をわがもたば
すゑの松山なみも越になん

後拾遺集に清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつゝ
末のまつやま波越さじとは

此歌どもを見れば山を波の越す事は必無き意にいへるを波打と名づけしはいかなるゆゑにや山の岩石に貝殻などのつきたるを見て昔は波のうちけるなりといふはいと笑ふべし

陸奥淺虫海岸（陸奥國）

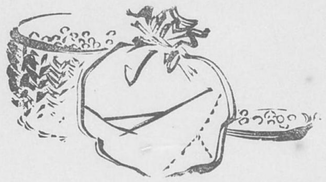
源空上人此地に巡錫の時一頭の牝鹿溫泉中に浴せるを見て其靈泉の功あるを知り鄉民にさとしてこれに浴せん事をすゝめしかど皆恐れて浴するものなくたゞ布を織るべき麻を溫泉に浸して蒸しけるゆゑに麻蒸の湯といひしがいつの頃にか淺蟲と文字にかくやうになれりしとぞ

帷子にむかしを語るいで湯かな

青森港

（陸奥國）

うとうやすかたといふ鳥の鳴きかはす外が濱と聞けばあはれに物寂しき海邊のやうに思ひしは昔にて開けゆく今の大御代には北海道にわたるに要なる津となりて青森の港のにぎはしさは年を追ひてさかりに。



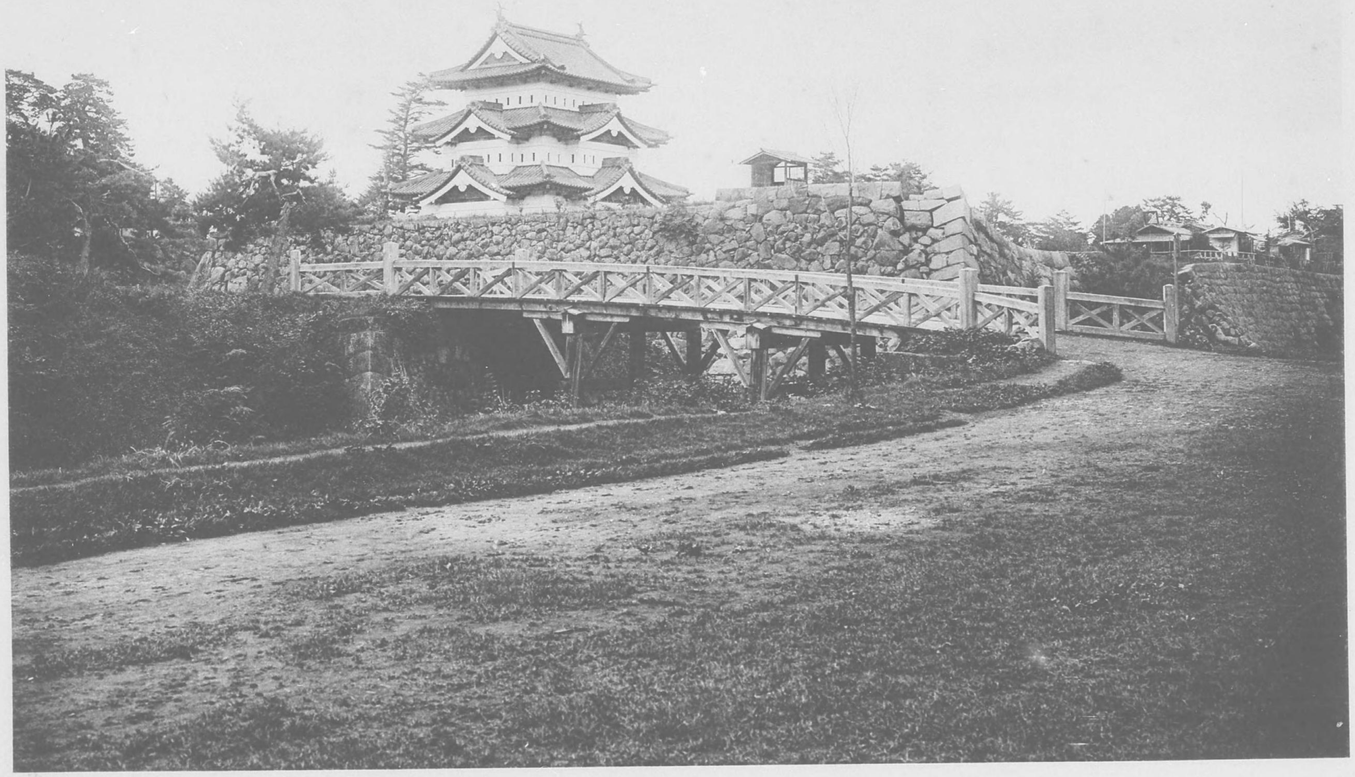
なれり橘南谿が東遊記に外が濱の母衣月といふ所には小石の中に舍利石まじれり白きあり飴色あり大豆の如く米粒の如く明徹うるほひ甚愛すべし殊に奇なるは此濱の磯近き海中に廣さ五十間ほどの舍利母石ありといへり

弘前城

（陸奥國）

弘前市は中津輕郡の東部に位し
地勢平夷東南北の三面は田園に連り
西は岩木川に枕して市街繁盛なり
中央の丘阜樹木鬱葱たる中に故城を

存す石壘三層塹濠四周牙城の外に
五郭十三門あり此城は舊津輕侯代々の
治所にして其藩祖津輕信牧が慶長
十五年に築く所なり明治四年藩籍
奉還の時より陸軍省の所管に屬せり

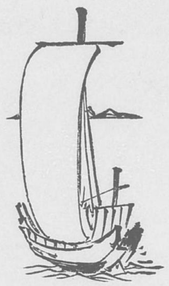


米代川帆船

（羽後國）

陸奥の水源より二十五里の間を通りて羽後の能代の港に注ぐ此米代川や幾千萬頃の田圃をうるほし幾千萬艘の舟運を助く其功流れと共に絶えず

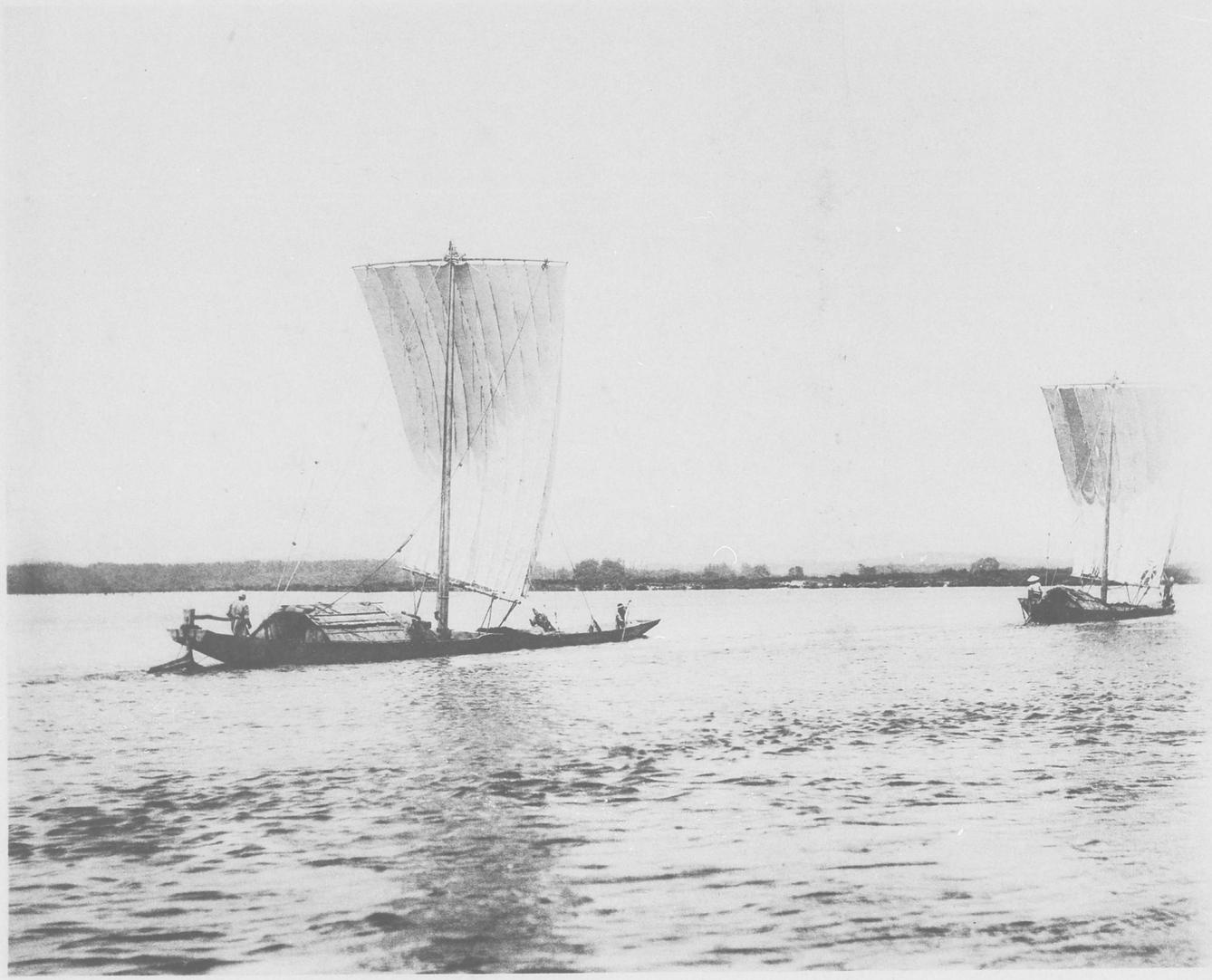
楊花點々衝帆過
燕子雙々掠水飛
淮上漁人閑不得
船頭對結綠簑衣



元人薩都剌が此詩は此所に誦すべくや

風は帆にきかねど
うよぐ柳かな

井資



八郎潟舩越橋

（羽後國）

八郎潟とは御曹子めきたる名なれど八龍湖といへば雄々しく琴の水海ときけばやさし春夏の際には白氣空中に生じて雄鹿より五城目森山のあたりまで虹をかけそのうちに

山川樹木の影人馬の形などを顯すことあり土俗にこれを狐館といふ彼の蜃氣樓海市など稱ふるたぐひなるべし又初秋の頃は湖の上に火の光燃ゆるを見る夜ありこれを亡靈火といひならはせり筑紫の不知火とひとしきものならん風景は暫くむきて近江の琵琶湖にはこのふたつの奇はなしと覺ゆ

双六帆掛島

（羽後國）

重一（チッチ）　一六（イロク）　五二（ゴニ）　四三（シサン）　骸子の目により

て石立の極りなき如く合ふあり離るゝあり

重なるあり孤なるあり奇岩怪石限りも知ら

れぬ双六灣のおもしろきに帆掛島のいつも

帆は揚げながら洋中一處に錨たろして追風

にも走らぬはあやしきながめなり

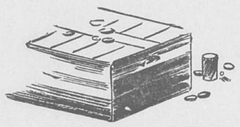
＊　＊　＊　＊

涙涼し岩におりはの

鵜とかもめ

うつ波も春の

音なり帆掛じま



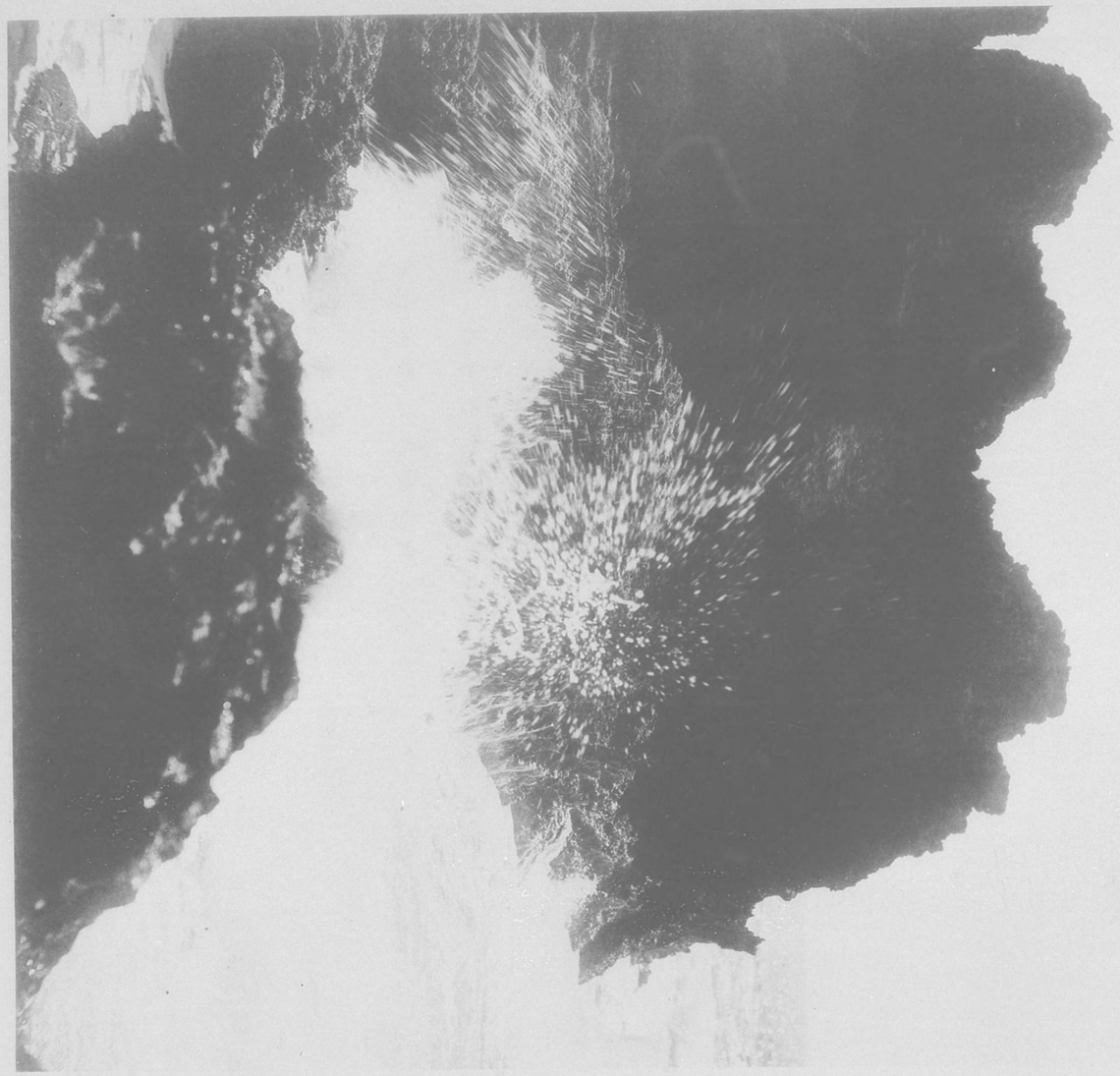
門前蛯島怒濤

（羽後國）

鵜村々下借仙橈　峭碧奇青出海潮
崖樹陰冥老麋睡　洋風空濶大濤驕
窟開鮫殿黑無底　石卷龍身天有橋
男子一搜雄鹿島　松洲始覺屬妖嬈
自加茂村到門前舟中作

頼三樹

島の名のをしかの
角のつの立ちし
いはほに觸れて
浪ごよむなり



吹浦羅漢岩（羽後國）

舍利弗の智惠をかりて巧みしか目連の神通によりて作りしか羅漢岩の奇態妙趣富樓那の辯にても說きつくし難からん

波の花みて笑ふらし磯の山
　槃特の外も暑さを忘れけり

說法の座をてらすらん盆の月
　雪の日や偏にさぶき右の肩

象潟那曾瀧

（羽後國）

稻村が嶽より落つる白糸の瀧また下りて那曾の瀧となる其傍に架かれるは白橋なり古歌あり證とす

懷中抄　讀人しらず

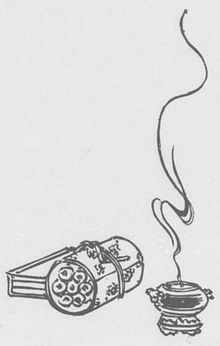
いではなるるなりの
白橋なれてしも
人をあやなく
戀わたるかな

千早ぶる
神は誓ひの木綿襷
かけてぞ渡る
那曾のしらはし

象潟古趾

（羽後國）

干満珠寺の方丈に坐して簾を捲けば風景一眼の中にゑがきて南に鳥海天をさゝへ其影うつりて江にあり西はむや〳〵の關路をかぎり東に堤を築きて秋田に通ふ道遙に海北にかまへて浪うち入る所を汐こしといふ江の縦横一里ばかりにもかげ松島にかよひて又異なり松島は笑ふごとく象潟は恨むがごとし寂しさに悲しみをくはへて地勢たましひをなやますに似たり



象潟や雨に西施がねふの花

と芭蕉が記せし名勝も文化年中の地變のために崩れうせたるはいと遺憾し

日向川より鳥海山を望む　（羽後國）

曉風猶覺袷衣寒　一帶松林十里山
正是江城餐雪日　來望鳥海白屏顏

六月朔望鳥海山作　大窪詩佛

鳥海山高北海濱　海雲山樹望悠々
不知何日大鵬翼　化作名山鎭羽州

長赤水

しろたへのつばさを
はりてひさかたの
うらにひゝらん
とりのみのやま

酒田日和山公園

（羽後國）

鳥海の雪を望むも最上の月を
ながむるも此山の名の日和こそよけれ
さはいへ小雨そぼふる日の
けしきも又靜かにていとよし
公園の西に日枝の社あり
そのうしろに植松の碑たてり

こは此地の本間なにがしが
海の濱べにあまた松を植ゑて
風浪の防ぎとせしいさをゝ
常盤につたへんとて
酒田の町人が
建てたるなりとぞ

最上川帆船

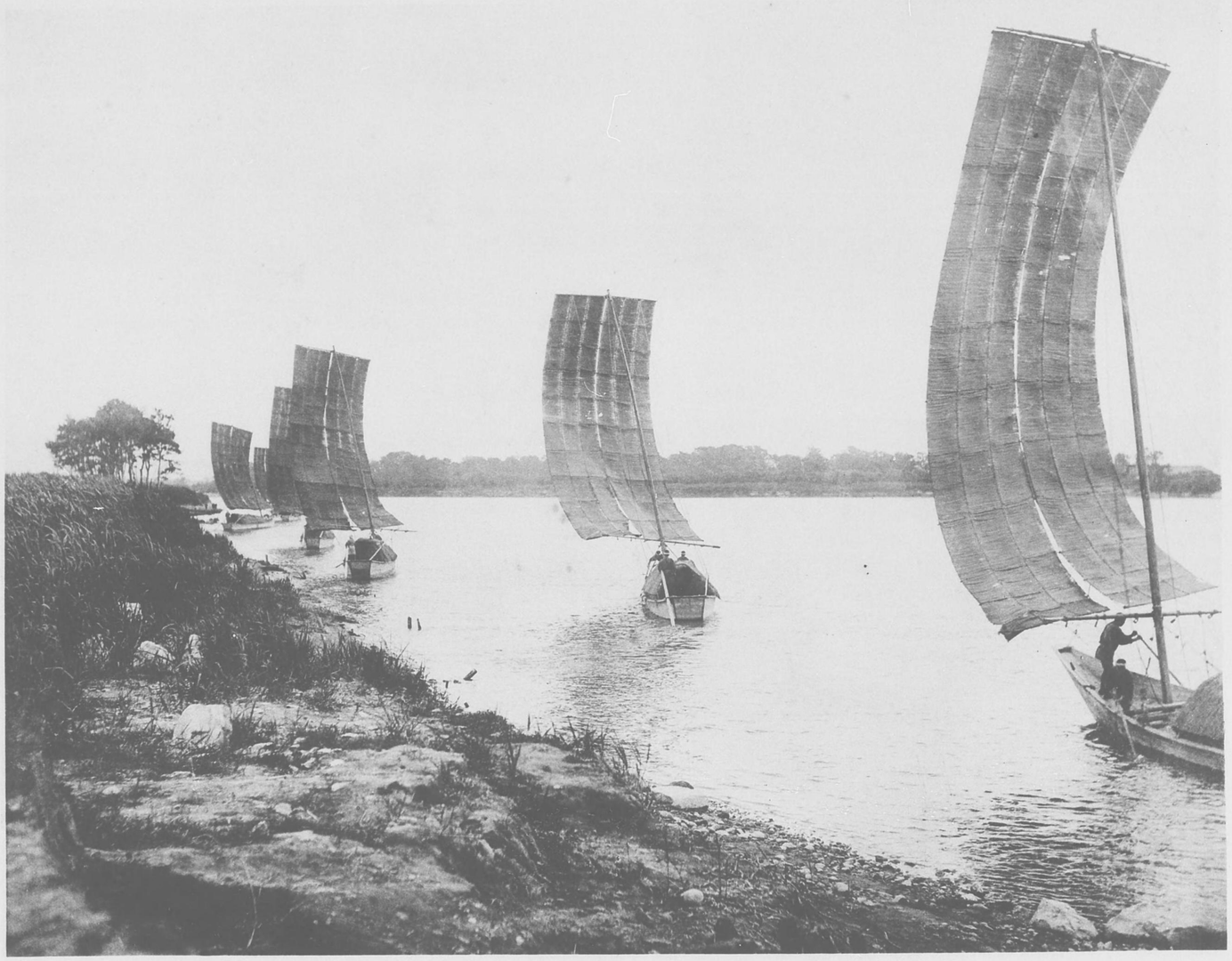
（羽後國）

最上川はみちのくより出でゝ山形を水上とす御殿はやぶさなどいふむそろしき難所あり板敷山の北を流れて果は酒田の海に入る左右山覆ひ茂みの中に船を下すこれに稻つみたるをやいな船とはいふならし白糸の瀧は青葉のひま〳〵に落ちて仙人堂岸にのぞみて立つ水みなぎりて舟あやうし

さみだれをあつめてはやしもがみ川

芭蕉

（奥の細道）



米澤附近

（羽前國）

米澤市は南置賜郡の北部にあり舊上杉藩の城市にして其地平坦東に松川を抱き西に鬼面川を擁し市街繁華なり養蠶機業盛にて米澤織の名天下に著る松が岬の公園に上杉神社ありて上杉謙信同治憲の靈を祀れり林泉寺は市内第一の巨刹にして直江兼續の墓あり佐氏泉公園は佐藤正信の宅趾にて其子繼信忠信こゝに生れしといふ其地田圃間の高丘にて老松雜茂し其傍に清泉噴出するを佐藤清水といふ故に此園を佐氏泉と名づけしなりとぞ

栗子峠の雪

（羽前國）

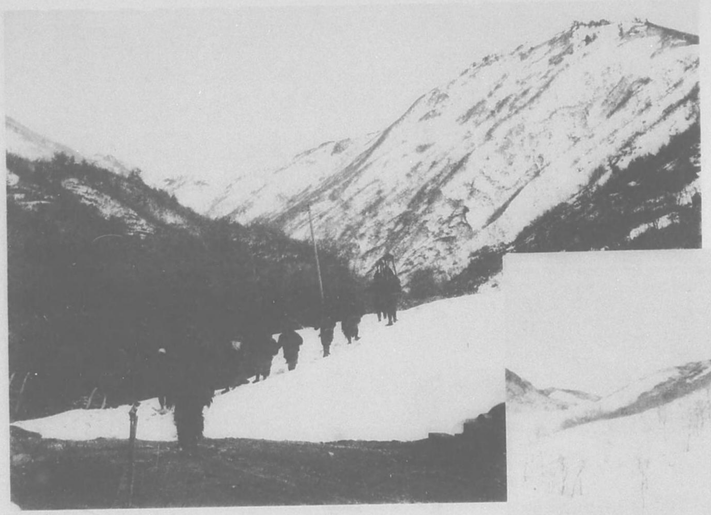
米澤より岩代の信夫郡に入る途中の栗子峠は隧道あり道路凸凹多くて積雪の頃は往來困難なり

吳肅公の詩句に

霏々早雪隱高松
著處寒氷拒短筇
芒屩信從青巘落
丹臺背指白雲封

長流翁のうたに

山まつの枝もとをゝの雪の花
人は手折らず己が下折れ



明治三十五年六月一日印刷
明治三十五年六月十五日發行　（非賣品）

發行兼印刷者　神戸市北長狹通五丁目四十六番地
光村利藻方寄留
八木富次

發行所　神戸市北長狹通五丁目
四十六番地
光村寫眞部

印刷所　神戸市北長狹通五丁目
四十六番地
光村寫眞製版部

淡